

「順口溜」(中国式川柳)の流布と

現代中国の社会変化「一九九〇～二〇〇八年」

江 沛

(訳 田宮昌子)

「順口溜（しんこうりゅう）」とは本来ひとつの文芸形式であるが、本文中では「民謡」「笑話」などの総称的に使われている。時事性と社会風刺、諧謔性を特徴とするところは、現代中国川柳とも言うべきものである。ここでは漢字での原語表記そのままを用いる。(訳者注)



一九七八年以降、中国は改革開放政策を推進する過程で、政治圧力と言論統制を一定の枠内で次第に緩めていき、人々は文革期の「私心が一瞬でも心によぎること徹底的に戦う」といった、内面の動機や心理の是非までを厳しく追及する政治運動の恐怖から少しづつ抜け出し、だんだんと体制の公的見解とは異なる民間の声を上げ始めるようになった。この時期に行われた経済体制改革は、職業、市場、物価および衣食住など人々の生活基盤に直接的な影響を及ぼすもので、長く計画経済体制のもとで暮らしてきた

た広範な人々にとって、社会の急速な変化に適応を迫られる中での集団的な困惑と不安は著しいものであり、人々は社会的公正や民間の利益を主張し始めた。

しかしながら、「党と一体化した」言論システムの慣行のもとにあつて、新聞雑誌やテレビといった主要メディアはみな国家の所管にあり、社会の矛盾や問題を取り上げることは非常に限定的で、民意を汲み上げ反映するという役割を發揮することは難しい。政府への陳情、嘆願書、座り込み、デモ行進といった行為のほかに、民意を比較的自由

に表現できる形式であるのが、まさしく本稿が取り上げようとする「順口溜」である。それは、永い伝統を持ち、人々を楽しませ、匿名で流布し、集団で暗示し、幅広い影響を及ぼす。それはユーモアに溢れた生き生きとした表現と生命力に溢れた多様な形式（戯れ歌、小話、ジョーク、対句、有名な句や詩のパロディなど）によって、政治体制やお役所仕事、官僚の腐敗、社会問題、経済的困窮、重大事件などを批判あるいは批評の対象として、政治と社会の影の部分の直截に指弾し、多様な階層の利害と声を表現し、社会の変化が引き起こした不適応と焦燥感に発散の場を与え、口伝えからEメール、携帯メールへと、伝達内容および範囲は日々増大し、次第に現代中国の社会変化を反映する世論特性の一つとなり、現代中国の重要な社会現象ともなったのである。

本稿が考察する順口溜は、その主な矛先を現在の政治と社会の変化が引き起こした社会問題に向けており、民俗学や歴史人類学が取り上げる民謡（民歌）の内容とは異なる。「流言」「謠言」といった概念を用いないのは、これらが中国語の中で多く否定的意味合いを持つこと、さらに中国の民間でも順口溜現象をこれらの表現で呼ぶことはまずないからである。

中国国内においては、これまでのところ「民間ジョーク集」といった表題で出版された小冊子に若干の順口溜が収

録されている例が見受けられるのみで、学術的観点から現代民謡（順口溜）を分析した論著はいまだ例がない。その原因としては、一つには、順口溜は速報性が強く、内容によって流布範囲も異なるため、収集が容易ではないこと、二つ目に、少なからぬ順口溜が同時代の政治や社会の敏感な話題に言及するため、自由な研究を可能とする条件を欠いていること、三つ目は、大多数の研究者が順口溜が現在の政治と社会の実態を反映し、民意を体現し、大衆心理を映し出す、その社会的価値をいまだ認識するに至っていないことにある。日本では、張玉林氏の『転換期の中国国家と農民（一九七八～一九九八）』が順口溜現象に対し、簡単な紹介を行っているが、論を展開するには至っていない。

一 由来と背景——社会の開放と言論統制——

中国の伝統的政治思想において、「民の口を防ぐは川を防ぐより甚し」という観念が多くの王朝体制の信奉するところであったことは、歴代「文字獄」が絶えなかつたことが証明している。この他にも、王朝体制は統治を堅固なものとするために、「吏を以って師となす」方針と科挙制を通して、国家イデオロギーの伝播を強化し、民心を掌握しようとした。国家は各種情報の発信を管理し、「海晏く河

「清し」といった天下泰平の盛世を造り出そうとした。行政システムに民意を反映する回路を欠いていること、また教育水準の低い民衆は迷信に惑わされやすいこともあり、民間では口伝えの箴言や流言、順口溜、小話などを通して、民意を伝達し、大衆レベルでの思潮を明らかにし、世論を形成していくことになる。特に、天災や戦乱、経済不況の時勢には、流言の類は一層かまびすしくなる。秦末の陳勝呉広の乱の「大楚、興らん。陳勝、王たらん」以来、唐末の農民起義の「蒼天すでに死す、黃天まさに立つべし。歳は甲子、天下大吉」、元末の「石人一隻眼と道ふ莫れ、黄河を挑動して天下反る」などの言は、人々の恐怖心を掻き立て、民衆の情緒に影響を与え、また政治権力を大いに脅かした。このため、周以来の歴代統治者はみな定期的に官を民間に遣わして「采風」「民謡収集」を行い、民衆の暮らし向きを知り、民意の動向を掌握して、以って政策を修正し、社会の安定を図ろうとしたのである。

清末以降、西洋列強の侵入は中国社会の激変を引き起こし、民間の「流言」は空前の隆盛を呈すると共に、天災や政変や「教案」(キリスト教会と中国人との間の事件)などの重大事件と関連するようになった。また、大一統(皇帝のもと)の統一の政治状況が打破されたことよって、世論は次第に解き放たれ、特に五四運動以後は口語文が盛んになり、民間における政治事件や生活変化を中心とした

戯れ歌、順口溜、流言は日増しに増加し、知識人が創作主体となり、新聞雑誌による広範な伝達の力もあって、ユーモアに溢れ、親しみやすく分かりやすく、思わず口をついて出るような、中国独特の順口溜の伝統にさらに磨きがかかることとなった。

一九四九年に新中国が成立すると、当時の民衆の将来への期待は、多くがソ連の電化された生活様式をモデルとし、「建物の上から下まで電灯に電話、農作業に牛はいらず、明かりをつけるに油はいらぬ」といった順口溜が生まれた。³⁾一九五八年の大躍進運動では、盛世を装い、闇雲に発展を追求する政治圧力のもと、「みんな李白を目指そう」の風が巻き起こり、民間では「田園詩作コンクール」や「街角詩作コンクール」「家庭詩作コンクール」が大流行し、大きなものでは「千人詩作コンクール」「万人詩作コンクール」、さらには数十万の聴衆を持つ「ラジオ詩作コンクール」まで登場し、何千何万という民間の詩歌が生み出された。それらの多くは大躍進運動への政治賛歌であり、知識人による「傑作」も少なからず含まれるが、ほとんどは似たり寄つたりの内容で型通りの出来、空想妄想の類で、基本的に民間の順口溜のレベルに相当する。この全國民的作詩運動は大躍進運動に呼応して生じたものとはいえ、それが形成した雰囲気と創作の伝統は、現代順口溜の発展に重要な影響を及ぼした。

総じて言えば、現代順口溜の出現の背景は複雑である。

第一に、文革収束後、毛沢東の政治思想を代表とする極左思潮に対する反省と文革に対する強烈な批判に伴って、中国は鄧小平のイニシアティブのもとに国門を開き、改革開放政策を実施し、極点に達していた政治的束縛と言論統制は日増しに緩和されていった。同時に、一九四九年から一九七六年に至るまでの、政治圧力のもとで蓄積していた大量の社会矛盾が一気に噴出したことと、新しい経済政策と外来文化の流入とが、深圳経済特区や広東の開放などの重要な経済現象をもたらしたことから、計画経済と公有制を基礎とした社会構造と価値観は猛烈な挑戦を受けることとなった。ひとは変化を望む一方で、変化を恐れもする。将来の見通しに確信を持っていない中で、焦りや興奮や困惑が社会に充満した。こうして、「十億人民のうち九億が商いをし、残りの一億も行商をする」「毛主席は中国人民を立ち上げらせ、鄧小平は中国人民を豊かにする」といった順口溜が出現する。政治に関するものが日々に増えていくが、その問題意識は鋭敏で、辛辣さもひとときわであった。

第二に、中国社会の経済開放の程度は政治改革のそれを大きく上回っており、政治体制、特に末端の行政管理が中国の市場経済体制の深化、社会の発展、民衆の生活に影響する決定的要素となった。しかし、執政党と国家が一体と

なった。党「国家」体制（党と国家が一体化した独特の政治体制）の制約のために、国政レベルにしろ、末端の行政管理業務にしろ、まだ透明度と公平性を欠いている。権力には監視が必要であり、人民が主権者というのは単なるスローガンに終わってはならないと多くの人が考えるようになった。現行の法律の不備、急速な発展がもたらした浮ついた風潮や羨望や自己中心的な道徳の欠如の相互作用のもとで、官僚の腐敗は日を追うことに勢いを増していった。広く知られた順口溜に「白酒飲めば一斤二斤なんでもない、ダンス踊れば三步四歩、マージャン打てば五夜六夜、謝礼もらうは七万八万なんでもない」と言う。「今時の幹部は妙なもの、五十六で悪さを覚え、カラオケ歌えば老いらくの恋、ダンスの相手は娘世代！」や「省の幹部は出国ブーム、地県の幹部は飲食ブーム、区郷の幹部は博打ブーム、村の幹部はお触りブーム」などは、一部の官僚による権力濫用、錢権交易（業者と政治家・官僚との癒着）や腐敗に対する民衆の普遍的な不満を存分に表現している。

第三に、現代化の過程にある中国社会は、その制度も構造も価値観も不断の衝突と融合の中にあり、社会矛盾が必然的に蓄積される。不適応や利益の侵害を感じる民衆は、往々にして特定の政策や、時には社会制度全体に憤懣の情を抱きがちである。例えば、次は計画経済体制から市場経

済体制への移行を語る順口溜である。「汗水たらして三十年、一晚で解放前に逆戻り」。次は、国有企業の民営化で一部の人間が国家財産を横領し、労働者が「主人公」となっていない状況を歌ったものである。「工場長は成金に、科長は肥え太り、工員は備品くすねるのが関の山」。海南省の売春婦問題の深刻さを歌う句もある。「解放前の紅色（革命）娘子軍が不滅なら、現代の黄色（売春）娘子軍も不滅なり」。

第四に、政治的見解や社会における利害の表現および意見の反映のシステムが十分に機能せず、社会問題および民情「窓口や監察機関やメディアは、往々にして行政や金融、甚だしくは闇社会の人物に関する重要案件を回避しがちであるため、人々は権力の監視といっても「蠅ばかり叩いて、虎を退治しない」、つまり適切な効率と強度を欠いている」と皮肉る。信訪問題は目下「幹部の腐敗や違法行為、規律違反問題」「企業の制度改革、労働保障や社会保障問題」「三農問題」「開発に伴う移転補償問題」「環境汚染問題」「訴訟問題」「基層行政機構改革中の問題」に集中している。しかし、大衆に言わせれば、信訪や監察などの部門は「ゴム球を蹴飛ばすように、押し付けあうばかりで、誰も（訴えを）受け付けず、誰も解決しない。みなりスクを恐れ、面倒を嫌がる」のだ。結果、五二・五％の

人々が信訪システムの問題解決能力に疑問を持ち始めている。ある順口溜は言う。「今日は信訪、明日は『市紀委』（市規律検査委員会）。庶民の足は棒になる」。大衆の不満は日々鬱積し、集団的な怒りを引き起こしやすくなっている。信訪制度が曝け出した効率の低さ、機密性の不完全さ、処理プロセスの不適切さなどの諸問題は、人々の強い不信感と不満を引き起こした。二〇〇八年七月二四日、中共中央規律検査委員会、監察省、人的資源社会保障省、信訪局は連名で「信訪業務規律の違反に関する暫定条例」および「信訪業務規律の違反に『中国共産党規律処分条例』を適用するに際しての若干の問題に関する解釈」を発令し、初めて信訪業務上の責任追求について規定を設け、信訪の処理に怠慢な官僚は責任を追求されることとなった。世論調査によると、八九・二％が支持を表明している。

第五に、一九九九年春のある調査によると、都市住民の報道情報系番組の評価基準は、順に「庶民生活の実情に迫っているかどうか」（七五・七％）、「報道が客観的で公正かどうか」（四七・一％）、「現実生活に直結しているかどうか」（四二・七％）、「社会問題に勇敢に斬り込んでいくかどうか」（三一・三％）などで、「党と政府の要求を体現しているかどうか」はわずか一九・九％であった。しかし、言論機関は党の監督下にあり、「党の喉となり舌となる」とが公式に強調されている基本的性質なのである。中国の

報道メディアの非大衆性という特徴は、人民のメディアを自認する報道機関に真に社会各層の要求を反映することを困難にしている。このため、人々は社会性と正義を求める天性から、しばしば「不平にして鳴らす」ことによつて、不満を発散し圧力を加えて、問題の解決を要求するのだ。メディア関係者が発生源と考えられる、ある順口溜に言う。「私は党の犬。党の正門前に陣取つて、党が指差した人物に命令どおりに噛み付くだけ」と。「主旋律」や「和諧社会の建設」の宣伝という任務を負われ、都市における開発に伴う移転問題や、不法占拠、金融腐敗、民衆暴動、官僚の腐敗など、社会矛盾を背景に噴出する諸問題を事実即して報道することができない彼らの情けない立場をみごとに言い表している。

当然のことながら、中国経済の急速な発展は社会のますますの開放を促しており、言論統制は緩み、政治の寛容度も明らかに高まった。人々は政府の論調と異なる声を上げ始め、あらゆる手段を活用して、自身の利益を守ろうとし始めた。これが順口溜が急速に流布の場を獲得した背景の一つである。政治体制改革の停滞や各レベルの官僚による権力乱用、経済活動や司法判断への干渉、さらには大学受験の地域間格差などの問題はますます深刻の度を加え、人々の社会正義と権利意識を常に刺激している。これらの矛盾や鬱積した怒りは、討論の形式で新聞雑誌やテレビに

取り上げられることも時にはあるとはいへ、主流メディア上では民情を十分に取り上げることは難しい。そこで、順口溜がより大胆率直に民衆が不満を発散することができる重要なチャンネルとして登場する。それは辛辣で精彩に富み、人々に快哉を叫ばせ、捕捉しがたく、刻々と更新を重ね、瞬時に広がる。近年、急速に普及が進むインターネットと携帯電話が新たな伝播媒体となり、中国人なら誰でも知っているが、口コミで伝わるだけで、公式メディアではほとんど見かけないという順口溜現象が形成された。

長年、中国政治は民主的実践の伝統を欠き、衣食の確保に精一杯の大衆も政治活動に参与する可能性や精力を欠いてきた。一九四九年以降は一党独裁体制の下、民間人や民間団体が実効性のある政治参与を行うことは困難になった。人民代表大会制度に対する人々の評価が高くないことがその証である。人々の政治参与意識は冷え込んでおり、政治への情熱は高いとは言えない。とはいへ、革命的な叛乱が起こることも望んでおらず、やむなく噂話や小話、川柳などの形で政治を揶揄しては、日頃の不満を発散し、情報伝達の必要性と好奇心も満足させているのである。人々が不人気な政策の改善を求め、腐敗現象を皮肉り、より多くの正義と公正を求める態度はますます顕著になっており、これが順口溜が生み出され、かつ瞬時に広がる現象の背景にある集団的心理と意識である。

二 主な内容——風刺・批判から

ジョーク・下ネタまで——

順口溜の内容は多岐にわたる。二〇〇〇年以前は政治風刺と社会の醜悪な現象の告発を行うものが最も広範に流布していたが、近年はジョークや下ネタ、祝祭日の挨拶シオートメールが急速に増加しており、社会の空気が、政治と社会の発展に関心を持つものから、開放性と気軽さに軽薄さが相俟ったものへと変化したことを印象づける。これらはおよそ以下のように分類できる。

(1) 一九八〇～九〇年代、中国経済と社会の急速な変化とそれにより引き起こされた諸問題が少なからぬ人々の不適應と不満を引き起こし、告発型の順口溜が生まれた。九〇年代初頭、都市化の進行の加速につれて、「出稼ぎラッシュ」が澎湃として起こった。大量に都市に流れ込んだ出稼ぎ農民は、社会と経済にメリットをもたらしたが、治安の混乱などの問題をももたらした。所管の行政部門はそれへの対応策を持たず、社会矛盾と不満は一気に高まった。¹⁵⁾「公安・検察・裁判所はすごいやつ、原告食ったら、次は被告も」(公検法、大蓋帽、吃完原告吃被告)。都市民は出稼ぎ農民が大量に流入し、都市生活や治安などに悪影響を

及ぼしたことに不満を抱いており、河南省出身者への差別的言辞(董存瑞の話や政治協商委員の議案提出など)が流布した。これらの順口溜は都市民・農民双方の多くに関係するため、瞬く間に広がった。

(2) 経済と社会の改革に伴い、多くの人々、特にインテリ層は、政治体制の改革には見るべき進展がないと考えるようになった。¹⁶⁾一九八〇年に鄧小平が提唱した党と政府、党と企業が一体化している問題の改革は、黨員や基層党组织の切実な利害に直結するために激しい反対を引き起こしたし、さらに言えば、この問題は中国共産党の政治体制の根幹に関わるために遅々として進展を見なかった。八〇年代末の試験的改革は八九年の民主化運動によって頓挫し、その後ようやく少しずつ回復した。一九九〇年代、中国共産党は私企業や中外合併企業での党支部設立を提唱したが、実情に即していないために困難を極めた。現行体制の下では、政治的公正を実現するに十分な保障や有効な監視を欠いているために、少なからぬ官僚が法律の抜け道を見つけてはレント・シーキングを行い、効率の低下、官僚の腐敗、便宜供与、公正性の欠如、法の乱用などの問題が大量に発生した。こうして、政治体制改革こそが根本的な解決の道であるというのが社会の共通認識となり、順口溜の重要な表現対象ともなった。報道機関は厳しい管制の下で

「おめでたは伝えるが憂いは伝えず」、新聞雑誌やテレビの報道は人々の感覚と大きくずれている。そこで、重大な事件が起こるたびに、報道が大々的に行われれば行われるほど、それに比例して順口溜も増加する。例えば、「国民党は課税マニア、共産党は会議マニア」「よしと言ったら駄目なものもよい。駄目と言ったらいいものも駄目。言われた通りに飲み込むだけ」「演台の上では孔繁森、演台降りたら王宝森。人民に会ったら秦森で、指導者に会ったら和坤に豹変」。中国共産党の「理論は現実と結び、密接に人民と結び、批判と自己批判を結びつける」という幹部の「三大風紀」は、「理論は実利と結び、密接に指導者と結び、表彰と自己表彰を結びつける」に改訂され、また「四つの基本原則」は「煙草は基本的に手土産品、お酒は基本的に付け届け、給与は基本的に変わらず、女房は基本的に役立たず」に改訂された。「革命の酒は日々に飲み、目は真つ赤に、胃も痛い。手はふらふら脚もふらふら、何をしたらやら記憶もない。人民は白眼視、財政は赤字。女房は泣き濡れ、ベッドの上で背中合わせ、規律委員会に駆け込みば、書記は面倒くさげにこう言った。いける口なら飲まないでどうする。むしろ毎日やっておる」。さらには官僚の腐敗のレベルを皮肉ったこんな順口溜まである。「全ての役人を一列に並べたとして、全員銃殺なら冤罪が出るかもしれないが、一人置きなら取りこぼしが出てしまう」。

(3) 市場経済の急速な発展の後も、国有企業、特に私営企業は実際の業務の上でしばしば政府機関の管理からくる束縛を受けている。党機関と政府機関が並列する二頭立て指導体制下で中国企業は行政管理上の矛盾に直面せざるを得ない。これが国有資産の大量流失や資源の浪費という事態を生む背景である。さらに、行政権力を監視する仕組みが存在しないために、権力による便宜供与が横行し、国有資産の大量流失を招き、大衆の強い不満を引き起こしている。順口溜に言う。「外国に加拿大(カナダ)があれば、中国には大家拿(みんなでむしり取る)がある」「リベール取って買い叩き、公印使って書類をでっちあげ、舌先三寸で財産を騙し取り、国費浪費を書類でごまかし、職権使つてうまい汁、国を言いぐるめて税逃れ、付け届けで昇進し、虚偽報告で業績上げる」(拿回扣、庄価讓価；挪公款、弄虚作假；騙錢財、搖唇鼓舌；吞国財、筆下生花；撈好處、巧弄權術；偷漏稅、哄騙國家；為昇官、賭注錢物；求政績、虛報浮誇)。

(4) 一九九七〜二〇〇三年にかけて、中国経済は高度成長後の経済構造の調整期に入り、失業人口が大量に増加し、多くの人の収入が急激に減少、そこへ社会保障システムは未整備という事態に陥った。医療制度改革のあと、旧制度の受益者であった多くの人々と高額医療費を負担でき

ない層の不満は非常に強い。というのも、市場経済の発展によって、中国社会各層における財産占有率は、従来の社会資源分配が低水準ではあるが相対的に公平であった状態を打破し、急激な両極分化によって、多数の「弱勢群体」〔社会的弱者〕を生み出した。一方で、多くの中国人が「寡きを患へず、均しからざるを患ふ」といったナロードニキ主義的価値観を非常に根強く持っており、激変した社会の現実を受け入れられず、社会に強い不満を感じるようになった。例えば、「リストラ」「下海」〔一般に非商業的職種から商業への転進を指す〕「破産」「失業」などの新現象はみな新時代の政治小話が風刺する対象となった。「リストラ」女工は涙も見せず、ナイトクラブに堂々と。昨夜は書記と寝たからにや、誰にも馬鹿にさせはしない」「愛もなく情もなく、一人孤独にさまよう。家族もなく金もなく、一人懸命に出稼ぎ暮らし。仕事もなく職もなく、堂々巡りで発狂寸前。携帯もカラ、充電する金もカラ、暮らし逼迫で気が晴れぬ。なべてこの世は無い無いづくし」。次は農民の負担の重さを嘆く順口溜である。「お国の税が軽くなっても、地元の二税〔郷の統一徴収と村の内部留保〕が重くなり、各種賦課金は底なし沼」。

(5) 中国は近年高等教育が充実を続けており、知識分子の総数は増加を続けているが、彼らは自身の生活や勤務環

境に非常に不満を抱いている。⁽¹⁾「弾頭作るより茶ゆで卵作る方が儲かる。メス持つ人より包丁持つ人が稼ぐ」という具合である。この層は多くが高等教育機関で大量の新しい思想潮流に触れており、漠然とした政治自由主義の意識を持っている。これらの層が順口溜の主な作者である。目下、高等教育機関や研究機関で発生したことが明らかなく順口溜は少なくないし、また民間で発生し、高等教育機関などで磨きかけられた順口溜も多い。

(6) 経済発展と教育水準の上昇に伴い、ますます多くの人が中国社会に山積する問題は政治体制に根本原因があると気づくようになった。一九九〇年以降、世界規模での社会主義体制の失敗に伴い、中国でも思想の権威の失墜が起こった。中国共産党は「実事求是」や「時代と共に進む」思想で改革開放を継続することを強調する傍ら、政治体制改革には積極的とは言えず、立党の基盤である「四つの基本原則」を絶えず強調し、「三講」〔党幹部は「学習」「政治」「正しい気風」の三つを重んじるべし〕という江沢民時代のキャンペーン、「三つの代表」〔共産党は先進的な生産力の発展要求、先進的文化の進むべき方向、中国における最も広範囲の人民の根本的利益を代表するという江沢民が提唱した新理論〕の学習と整風活動を立て続けに展開した。これらの活動は体制のあり方に変更を迫るようなもの

ではなかったから、実際の問題を解決できるはずもなく、一部ではうんざりするような形式主義に変質してしまつた。そして、このような現象に照準を合わせた順口溜が登場した。例えば、「かつこいいのは記者会見、真面目なのは民主生活会、楽しいのは常務委員〔常委は胃腸と同音〕拡大会議、癒されるのは検査研究〔研究は酒タバコと同音〕会議、盛り上がるのは切磋〔麻雀の暗喩〕会、おしゃれなのは夜総会〔ナイトクラブ〕、やつかいなのは職員代表会議、頭に来るのは工会〔労働組合〕、出たくないのは規律検査委員会」(最神氣的は開記者招待会、最正經的是開民主生活会、最高興的是開常委〔腸胃〕擴大會、最舒服的是検査研究〔烟酒〕會、最興奮的是開切磋〔麻將〕會、最瀟洒的是去夜總會、最尷尬的是開職代會、最惱火的是開工会、最不願開的是紀委會)。「三講」キャンペーン期間中の官僚に対する庶民の見方は「三講前はびくびく、三講中は嘘八百、三講終われば元の木阿弥」。SARSが流行すると、「SARSは特殊な病原菌の發展要求を代表し、恐怖文化の發展方向を代表し、広範な野生動物の根本利益を代表する」と揶揄する。二〇〇八年前半は、華南の雪害に四川の地震、鉄道事故など天災人災が踵を接して起こり、一方で物価上昇が急激に進行し、オリンピック開幕が迫る中、中国社会の現代化がなかなか進まないことに不満を表明する携帯メールが出回った。例えば、「中国社会は矛盾

だらけで、解消不能、やみくもに数年やったが、一向に良くならず、目をばちくりさせて、しばらくこらえて、もう数年やみくもにやっているうちに、慣れっこになった」〔それぞれ指導者の名前に音をかけている。原文参照〕(中国是一個「毛(沢東)」盾社会、「華(国鋒)」解不了、「胡(耀邦)」搞幾年、「趙(紫陽)」様不行、「鄧(小平)」着眼睛、「江(沢民)」就一下、再「胡(錦濤)」搞幾年、就「習(近平)」以為常了」という具合である。

(7) 三〇年来の改革開放は中国の社会文化に大きな転換をもたらし、人々の観念は巨大な変貌を遂げた。これらの社会現象も順口溜の話題となった。例えば、「雑誌をめくれば美女づくし、テレビをつければCMづくし、新聞めくれば訓話づくし、記事を見やれば署名づくし、新書を買えば誤字づくし、手続きすれば出費づくし、お偉方の視察は公用車づくし、飲食は公費づくし、往來見やれば伊達ものづくし、友人集えば名刺づくし、商いに手をだせばペテンづくし、年末年始は検査づくし」という具合である。

(8) 五四運動以降、女性解放は中国社会の進歩や平等、民主化の指標の一つと見なされるようになり、伝統的な「男尊女卑」の価値観にも変化が生じ、女性の地位は向上した。一九八〇年代以降の経済の現代化の過程で新技術の

大量導入により、性別の職業への影響は減少の一途を辿り、多くの女性たちが学歴や性別上の特性を生かして、芸能やスポーツ、金融、商業、会計、秘書などの業界で優れた実績を上げ、「ゴールドカラー」「高学歴の高所得者層」や「ホワイトカラー」として羨望の的となるようになってきた。そこで、「伝統的な「三従四徳」の教えをもじって、こんな順口溜が登場した。「奥方に対しては、外出に付き従い、命令に服従し、誤りに盲従する。化粧は待つ、誕生日は覚える、癩癩は耐える、浪費は見逃す」。

(9) 性的な内容のメールの流行も近年の順口溜流行に見られる重要な現象である。これは中国社会の開放と価値観の変化や世俗化の傾向を反映すると共に、人間性の解放や個性の提唱の掛け声の下で進行する欲望の噴出や道德規範の後退、家族構造の不安定化といった面をも反映している。例えば、「新女性の特性は、六十男を墮落させ、五十男の金を巻き上げ、四十男の家庭を粉砕し、三十男の腰を折り、二十男を独り身にする」。さらに「お前の上に乗りたいくて仕方がない、たとえ一分でも天にも昇る。もうこれ以上我慢できない、ついに恥も外聞もかなぐり捨てて飛び乗った、久しぶりの最愛の教卓に！」。または「卵を入れた籠を下げて農婦が行けば、数人の大男が襲い掛かる。起き上がった農婦、泥を払って言うことにや、卵が無事なら

何でもないさ」「街角できれいな娘がささやいた。百元くらいいじや私はその手の女じゃない、二百元なら今晚あんたのものになつたげる、三百元なら今夜は人間扱いしないでいい、四百元なら何人でも構わない、五百元なら人じゃなくても構わない」(在街辺、一漂亮小姐對我說：「一百元我不是你想的那種人，兩百元今晚我就是你的人，三百元今晚你千萬別把我當人，四百元我要問問你今晚要帶幾個人，五百元我不管你今晚帶的是不是人！」)。

このような類いのメールの流布は広範囲に及び、影響が大きかったため、二〇〇五年八月に改訂された「中華人民共和國婦女保障權益法」は明確にそれらを「セクシャルハラスメント」として扱っている。二〇〇六年三月一日に施行された「中華人民共和國治安管理処罰法」は関連する処罰規定を盛り込んだ。以後、いくつかの省や市が、男性が女性に性的内容の携帯メールを送りつけることを「セクシャルハラスメント」とする地方法規を相次いで成立させた。しかし、現実には性的内容のメールは依然として氾濫しており、抑止効果は上がっていない。

(10) 政治の世俗化も近年登場した新しい特徴である。例えば、春節や元旦の年賀メールには「党中央はあなたの願いが叶うことを、國務院はご多幸を、交通省は交通安全を、衛生省はご健康を、財政省はご金運を、人事省はます

ますのご昇進をお祈り申し上げます」という具合である。

また、毛沢東の名言をもじった「どこぞの何某が毛主席の指示を伝達する。『年に一度のお年始回りは何でもない。』

難しいのは、人の迷惑顔を知らぬふりして正月に二度も三度もお年始回り、これこそ最も最も難しい!』(『毛沢東選集』第一七卷八六八頁参照) などというものもある。

(11) 人々の生活が豊かになるにつれて、若者たちのお笑いメールが増えた。例えば、「心を鬼にして背を向けて立ち去ろうとしたその時、背後からお前の哀れな泣き声が聞こえた。肺腑をえぐるような心の痛みにお前をどんなに愛しているかを悟った。俺は振り返ってお前を抱きしめた。

『この豚、売るのはやめだ』。あるいは「あの日俺はお前を見た。スーパーで! お前がそつと手をバーコードスキャナーに当てると、表示は『豚の蹄八元』。機械が故障したかと顔を近づけると、表示は『豚の頭五元』と出た!」。二〇〇八年北京オリンピックの開幕式は事前には極秘扱いだった。そこで、民間にはこんなジョークが流布した。「オリンピック開幕式の企画が決定。メイン会場に一万卓のマジジャン卓を並べ、八万人が民族音楽の伴奏で一斉にジャラジャラ、音楽がやむと八万人が一斉に叫ぶ。『リーチ!』(胡と音をかける)」。ここで、胡锦涛国家主席登場、開幕を宣言する」。

(12) 近年、保護措置の不備と急速な工業化によって生じた環境汚染と生態系の破壊が、豊かになった中国人の心配事となってきており、これに関連する順口溜が現れ始めた。例えば、河川汚染を皮肉った河南省の順口溜は、「五〇年代は米を研いで野菜を洗い、六〇年代は服を洗って灌漑し、七〇年代は水質が悪化、八〇年代は魚も海老も死に絶えて、九〇年代は心身に支障を来たす」。あるいは擬人化したジョークもある。「(黄河)『長江、長江、こちら黄河です』(長江)『黄河、黄河、こちら黄河です』」。長江上流の深刻な土壌流失が長江の土砂含有量の増大を招いている現状をみごとに言い表している。

(13) 中国では重大な出来事には、安全や対外イメージへの懸念から往々にして一定の操作が加えられがちで、本来なら国民が共に参与できるはずのよい出来事を変質させてしまう。順口溜に言う。「業績は足し算、任務は引き算、報酬は掛け算、過失は割り算」。「オリンピックがやって来た。どこもかしこもきれいごと。聖火が来れば道譲り、外人が来れば北京は青空。車減らしただけのこと。食品安全で値段は高騰。オリンピック終わればみな元通り。人民の利益はただの建前。人口多けりや問題多い。食えてるんだろ、文句あるまい。外国メディアが中国褒めりや、それでお国は悲願達成。国内の民は次のまた次」(奧運一到、到

処高調；火炬一到，人民讓道；洋人一到，空氣達標；汽車
變少，環境變好；食物標準，實在叫高；奧運一完，全部取
消；人民利益，實不重要。人口衆多，問題能少？草民何
怨？已能吃飽；只要外媒，齊誇咱好；咱的目的，就已達
到；國內之人，實不足道。

以上、一九八〇年代の順口溜は、その主題や表現形式、
先鋭性などの面において、伝統的な順口溜の系譜に連なり
ながらも、新しい特徴を持っている。経済の発展と社会の
開放度の高まりによって、順口溜の主題は従来のものを遙
かに乗り越え、社会変化のあらゆる面に斬り込み、民意を
みごとに表現し、怒りや苦しみの叫びを上げ、諦めや葛藤
を活写している。順口溜を一望することは、まさに現代中
国の社会変化と民意を写し取った最もリアルで迫力あるパ
ノラマを眺めることである。

三 受け手と流布方式

——口伝え、Eメールから携帯メールまで——

当初、順口溜の主な作者は、一定の教育水準を有するイ
ンテリ層と民間の「芸達者」たちであり、内容は政治風
刺、社会批判が主であった。近年、競争圧力に晒されてい
る中国移动と聯通（ともに通信関連企業）の各地の営業部
門が、人々の耳目を集めて顧客を獲得しようと携帯メール

を捏造して配信するようになった。内容は祝祭日の挨拶
や、下ネタ、ジョークなどを主としている。この二者の結
合が、現代順口溜の基本形態となっている。当然ながら、
全ての順口溜の作者を探し当てるのは不可能である。とい
うのも、広く流布した順口溜には大抵いくつものバージョン
があり、内容には若干の違いがある。流布の過程で自分
の理解や地域や業界の事情に基づいて変更が加えられて
いった結果であろう。順口溜現象の発生は、公開の輿論が
制限され、社会矛盾が百出し、人々が不満の捌け口を求め
ているという社会的基礎の上に形成されたものである。

順口溜は、主に都市の各層の人々の間で流布しており、
各レベルの公務員や高級官僚までも含んでいる。これに
よって新たな都市の公共空間が形成されたが、ここでの流
布は高速かつ目に見えない形で進行する。順口溜は多くが
知人間で流布するため、政治ネタであろうと、社会ネタや
下ネタであろうと、誰かが告発でもない限り、責任を追
及されることはない。こうして非常に独特の世論空間が成
立した。目下の言論統制システムは、正式な出版物やメ
ディアを規制するには有効であるが、順口溜の流布に対し
ては今のところこれといって有効な手立てはない。

この二〇年来、中国经济が急速に発展し、社会の開放や
教育水準の向上がどんどんと進むのに伴い、順口溜の受け
手は絶えず変化してきており、その把握は困難で、また複

雑である。

分類すると、順口溜の流布経路は大きく二分できる。民間の、それも非印刷メディア（携帯メールやEメールなど）は言論統制システムが到底許容できない内容を多く流通させている。これに対し、独立的で開放的意識を持った思想的出版物や地方の娯楽出版物では大抵びらに議論可能な社会問題についての順口溜が主に掲載されている。さらに具体的に分類すると、教育水準や社会問題への関心のあり方の違いによって二分できる。高学歴者の間では、政治や社会問題に関する順口溜が多く、一般市民や農民は社会現象に対する関心がより強い。祝祭日の挨拶や性的メールとなると階層性は明らかではなく、流布範囲も最も広範であり、生活のリズムが加速する中で現代中国社会の風俗の変化の趨勢と性意識の開放度が象徴的に現れている。また、好奇心や新しもの好きの心理から、通常の経路では得られない「一口コミ」に興奮するという面もあるだろう。

エリアで見ると、高学歴者は社会批判意識が強く、社会問題の分析も鋭いため、順口溜はまず高等教育機関や研究機関、政府機関から市民各層に拡散するのが通例となっている。次に、情報へのアクセスが容易で教育環境も整った東部から西部への拡散、都市から中小の町、そして農村への拡散が見られる。第三に、政治の中心である北京の市民は他の都市にはない政治参画意識を有しており、また政治

に関する情報にも非常に通じているため、政治風刺を帯びた順口溜の多くは北京で生まれ、その他の都市に流布していく。この他に、北京人が持つ政治的優越感や、地方からの人口流入とそれに伴う就業機会の減少などの現実に対して持つ焦燥感から、流入人口を風刺したり、けなす順口溜の多くは北京人により作られて流布している。

階層で見ると、順口溜の流布は一般にインテリ層やホワイトカラーから労働者やサービス業従事者に広がり、党や政府の下級官僚から市民に広がり、都市住民から農民工〔農村からの出稼ぎ労働者〕、そして農村住民へと流布している。

業種でみると、都市のタクシー運転手が順口溜流布の重要な媒体である。一九九〇年前後から中国の各大都市でタクシー業が発展を見せ、個人の自動車保有台数が少なく、公共交通が発達していない時代において、タクシー業は都市の経済発展と社会進歩にとって欠かせないものとなった。タクシーは毎日街に出て、雑多な客層と接触し、多くの情報に接する。加えて、活動スペースが狭く、コミュニケーション欲求が強いという職業上の特徴から、順口溜の流布は彼らにとって絶好の暇つぶしとなる。第二に、高等教育機関の教員学生などのインテリ層は思想的に鋭敏で、社会への関心が高いため、順口溜を流布するだけでなく、その創作者でもある。第三は、行政部門の公務員である。

彼らは政治資源の占有者であり、各種の政策の内幕に通じている執行者である。彼らは一部の社会現象や政官界の腐敗に強い不満を持っており、影に日向に順口溜を流しては内面の憂さを晴らすのである。

順口溜の空間と流布方式は常に変化している。およそ一九九五年頃までの順口溜は政治的で社会批判を内容とするもので、加えてEメールや携帯電話（一九八七年使用開始）はまだ普及していなかったため、順口溜の創作と流布は主に人の移動と郵便によっており、東部の発達した地域や、教育水準が比較的高い中西部の主要都市の職場に限られていた。一部の出版物、例えば地方新聞や業界紙に時折順口溜が登場することがあっても、内容は言論統制する側が許容可能な、あまり露骨でない風刺に留まっていることが多かった。一九九五年以降、中国経済は高度成長期の様相を呈し、「津々に電話を通し、浦々にネットを接続する」の発展計画のもと電話普及率が上昇し、ネット人口が増加した。特に二〇〇〇年以降、携帯電話の発信量が激増し、順口溜の流布形式には大きな変化が生じた。順口溜の流布はもはや都市民や学術界に留まるものではなく、口伝えやEメールの形式をも突破し、新しい無制限の流布空間を形成して、一般民衆がいつでもどこでも送受信可能となり、各地の各階層の人々の感情や社会現象への認識を携帯電話メールで瞬時に伝えることができるようになった。順口

溜の草の根化の趨勢は明らかとなり、民意民情の表現はより豊かになった。

二〇〇〇年以降は携帯電話メールが順口溜の流布メディアとなった。近年は中国電信業界の競争が激しさを増し、商業化の手段が多様化するにつれて、特に都市における携帯電話の普及が進んだことを背景として、発信量の膨大な携帯電話メールをめぐって通信業界大手である移動と聯通が激しい競争を繰り広げている。中国情報産業省の正式な統計によると、二〇〇〇年以降、携帯電話の発信量は大幅に増加しており、二〇〇〇年には一〇億件余りであった発信総量は、二〇〇四年には二一七億件に達し、五年間で二一七倍になった。二〇〇六年の移動の携帯電話年間取扱量は四二九六・七億件に達するから、最低料金である一件〇・一元で計算しても営業利益は四二九億元になる。二〇〇七年末までで、全国の携帯利用者数は五億四七二八万六千人に達し、携帯電話の発信量は五九二・〇億件で、三七・八%の増加を見せている。通信各社にとって携帯電話取り扱いは巨額の利益をもたらすため、一部にはスタッフを雇って各種メールをわざわざ作成し、利用者の発信を誘う現象も現れた。元旦の祝い、春節の挨拶、端午の祝辞、中秋の望郷の思い、国慶節のねぎらいなど、なんでもある。社会現象を風刺し、下流社会を皮肉り、社会格差に異議を唱える携帯電話メールも登場する。さらにはポルノ的内容を配

信して、利用者の転送を誘う業者も現れた。例えば、二〇〇八年四月に山東省で胶済鉄道事故が発生すると、こんなメールが登場した。「胶済鉄道事故の発生は改めて我々に警告を発した。脱線〔不倫することの暗喩〕なんか恐るに足らず、衝突〔見つかること〕したら一大事」。ネット上には、www.haodanxin.com〔おもしろメールの意〕とかwww.haha.3322.net〔笑い声の擬声語〕など、クリック率を上げるために、大量の順口溜をジャンルや種類ごとに掲載し、利用に供する専門ページを開設するサイトまで現れた。その出発点は商業利益ではあるが、人々の社会問題に対する不満をうまく掬い取って、このように故意に作成されたものであっても広く流布する例も現れた。近年の中国の開放に伴う軽薄化、道徳感の喪失などの世相にうまく調子を合わせた結果である。

三〇年来の開放政策の結果、現代中国における言論統制は緩和の傾向をますます強めているが、党国家体制から来る束縛を受け、特に近年、新疆やチベットなどにおいて民族問題が激化し、社会矛盾も拡大の勢いにある中、国家の安定やテロ対策、社会治安などが政府および民衆が最も関心を寄せる焦点となり、関連情報の統制も「外に緩く、内に厳しい」特徴を見せている。しかしながら、順口溜はネット技術の発展と携帯電話の急速な普及などテクノロジの力を借りて従来の管理統制システムを突破して流布

し、民間輿論を表出し、社会変化を真に記録する役割を担うに至った。民間輿論の流布に起こったこの変化は大変興味深いものである。

四 機能と価値——ストレスの緩和、

民情の表出、民意による監視——

順口溜は、社会の草の根の部分にある気分であり、社会的な公正感と正義感の表現であり、大衆の洞察と偏見であり、現実への無力感から来る「ブラックユーモア」である。順口溜は不正確だとか一面的だとか言っても、それが真に迫って舌鋒鋭く、深い洞察力を備えており、言論統制のもとにおかれた民意民情の重要な媒体であることを認めないわけにはいかないだろう。社会や制度など現実問題のリアルな反映として、順口溜は重要な役割と分析価値とを有している。

中国経済は改革開放によって急速に発展し、人々の生活は大いに向上した。人口の過剰、地域間格差の大きさ、社会問題の複雑さ、社会の動きのテンポ・アップ、就業機会の不足、各階層利害の有効な調節弁および権力監視システムの欠如、民意民情をくみ上げるシステムの機能不全……、こうした現実から、順口溜の流布に借りて、あれこれの社会的ストレスや鬱憤を紛らすのが各階層の人々の余

儀ない選択となっている。しかしその一方で、「茶碗を持ってば肉を食い、箸を置けばお袋ののしる」「ちやんと食べさせてもらっているのに、親に文句を言う」などの順口溜は、高度経済成長期の中国で人々の暮らしが向上を続け、現代化を推進する国家の方針が高い支持を得ており、社会の安定重視が共通認識となっていることも示している。体制の弊害や新しい社会問題の出現は、人々の不満や改革願望を増加させるが、全面的な革命や反乱の勃発を招くような社会条件は備えていない。

一九九〇年代以降、経済発展の影響に伴い、生活レベルの向上、健康志向、政治への無関心といった世俗的な姿勢が社会文化の新潮流となった。同時に、生活や就業から来る圧力が人々の関心の焦点となっていた。一九九六年一〇月に有名な民間調査会社、北京零点調査会社が北京、上海、広州、武漢の四都市で行った追跡調査によると、都市住民の個人生活上の関心事は順に、健康、収入、子供の進学、仕事の満足度、趣味、自己イメージ、家庭内の問題や家事、不動産などで、国内の社会問題では順に、治安問題、社会保障、政治倫理、インフレ、住宅改革、リストラ、教育問題、国营企業改革などとなっている。四都市の市民の官僚の腐敗についての感じ方は驚くべきものである。三三・二%が「ますますひどくなった」と回答し、二・四%が「基本的に軽減しておらず、相変わらずだ」と

回答、三六・〇%が「やや軽減したが、一部ではまだかなり深刻である」。これら三者を合わせると、九一・六%という驚異的な数値に達する。このような調査結果と当時流行した多くの順口溜の内容は完全に符合している。

公開された輿論による監視メカニズムが欠如した状況の下で、順口溜の流布、特に地域性のある順口溜の流布は、実質的に行政や輿論に次ぐ「第三の監視力」を發揮している。住民が地域や都市の発展に満足しているか否かは、往々にして政治風刺の順口溜の有無や多寡となって現れ、地方の党・政府にとって無形の巨大な圧力となっている。地域や都市の行政部門は一方では政治を風刺する順口溜を流さないよう要求しながら、一方では順口溜の批判が集中する点の改革を行っている。例えば、一九九〇年代の天津市は、GDPの成長率が年一〇%以上であったが、産業構造の転換に伴う国有企業の閉鎖が多く、リストラされる労働者が激増し、人々の不満が多かった。加えて、天津が中央の直轄市の一つであることから、市民たちは北京、上海、深圳、広州などより成長の早い大都市と比較して天津の経済発展を論ずるため、市党委員会や市政府の仕事ぶりに強い不満を抱いていた。当時、市の指導部を指弾するこんな順口溜が広まった。「張立昌が北倉（天津市の火葬場所在地）に入ったら、天津人民の生活は向上する」「天津には三張あり。果仁張、崩豆張にデータラメ張」。極めつけ

は「北京に行って己の地位の低さを知り、広州に行って己の財布の軽さを知り、上海に行って己の食の貧しさを知り、東北に行って己の気の小ささを知り、天津に来て社会主義の良さを知る」であろう。これらは市民の天津市党委員会と市政府の経済発展事業への不満を直截に表現している。ある時期、天津市はタクシー運転手にこのような順口溜を流布しないよう求める通達をわざわざ出したが、民意は犯しがたく、効果は乏しかった。二〇〇三年以降、天津の经济建设は明らかに加速し、市政府の業績を市民も広く認めるようになり、地方政府指導部を直接批判するような順口溜は次第に少なくなった。しかし、市民の多くは張立昌の執政期に天津が経済発展のチャンスを見逃したことを忘れておらず、天津発展の功績を二〇〇三年に着任した新市長戴向龍に帰すのである。このような順口溜が広範に流布することは、政治家のイメージに巨大なダメージを与える。そこに表出された民間の不満が、地方の人民代表大会や政治協商会議で表明されたり、新聞記者の「内部情報」の形で党中央や中央政府部門に伝わったりして、行政方針や人事異動発令の非公式な背景となる。

順口溜の内容は風刺が主なものである。このような情報の流布は偏見や、時には誤解さえ含むとはいえ、党と政府の執政上の問題点への鋭い指摘はおおむね大衆の実感と符合するものであり、水面下で党と政府のイメージにダメージ

ジを与え、大衆が共有する政府当局への偏見と不満を強める。一九九〇～二〇〇〇年にかけて、順口溜の流布はいよいよ盛んになる勢いがあった。当時、中国経済は依然として急速に発展していたが、党・政府の権威は揺らぎ、党・政府と大衆の関係は、両者の利害の不一致によって明らかに緊張し始めていた。順口溜に言う。「党の政策はお月さま、満ちたり欠けたり定めなし」。あるいは官僚を皮肉って「上司の前では犬になり、庶民の前では虎になり、愛人の前では猫になる」。出版物上でも順口溜を引用して官僚の腐敗を指弾する報道が時折見受けられた。

順口溜の流布には、民間の怒りを発散させる重要な効果がある。社会学理論によれば、いかなる社会にも民衆の怒りを和らげ、重大かつ全社会的な民衆反乱を醸成するのを防ぐ、こうした「調整弁」が必要である。現代中国における順口溜の隆盛はまさに社会の「調整弁」の役割を果たしている。順口溜を流布する人々は必ずしも誰もが錢権交易や政治腐敗について内情を知っているとか、実体験があるわけではない。特に発展の恩恵を享受している層では、世相や制度に部分的不満を持つてはいても、社会を敵視するまでには至っていない。順口溜の流布は彼らにとって単なる気晴らしや好奇心、遊びであって、どつと上がった笑い声の中に社会問題への行き場のない不満もしばし雲散霧消するのである。

一九八〇年代、特に一九九〇年以降になると、中国経済の急速な発展の中で、多くの人々が戸惑いや無力感、焦燥感を強く表現するようになった。特に、多くの市民に関係する国営企業改革とリストラ問題が経済格差への不満や自己の利益を守ろうとする集団抗議の気分を醸成した。各級党・政府指導部の多くは、大衆の間に蔓延する強い感情を考慮して、順口溜の流布を放任する態度を取った。中央宣伝部門がわざわざ調査に乗り出したことがあったが、全国いづれの地方のいづれの部門も順口溜の取り締まりに興味を示さなければかりか、地方の党・政府職員自身が積極的に流布している場合さえあった。このような状況は党・政府職員が社会変化の中で自身の利益がたいして増えないことに対する惰性、あるいは党政不分や錢權交易、公務員のマインスマージに対する大衆の非難への共感、さらには幹部人事に見られるコネ、賄賂、媚び諂いへの不満を反映しており、基層レベルの党・政府の指導力は一層弱体化した。

内容を見れば明らかであるが、順口溜は多くが政治、経済、社会、教育、文化などの面に現れた問題を風刺するもので、時の中国インテリ集団と大衆の認識レベルと政治文化心理のリアルな写真であり、さまざまな階層の利害・要求の表出でもある。ある時期に広く流布した順口溜は、影響力が大きく大衆の強い反応を引き起こした社会問題に鋭

く、正確に斬り込んでおり、政府見解と突き合わせて見てみれば、より正確に中国社会の実態を把握できるだろう。二〇〇三年の最新の世論調査によると、人々が最も解決を望んでいる政治社会問題のトップ5は、順に、「党・政府幹部の資産を公開し、有効な監視システムを全国レベルで立ち上げる」「一二年來の腐敗対策が効果を上げない原因の総括」「社会の貧富両極化状況の解決」「政治体制改革を實現し、人民の権利を実体化する」「法治を確立し、法の下の平等を實現し、官僚の特権に反対する」となる。中国共産党第十六回全国代表大会後の新しい党中央指導部（政治局常務委員）に対する全体的満足度は四六％で、温家宝、胡锦涛、羅幹、曾慶紅、吳邦国への満足度は順に、八七％、八二％、七一％、四二％、四〇％である。呉官正、黄菊、李長春、賈慶林らの元の任地での調査結果を見ると、その満足度は順に、五八％、二六％、二四％、二〇％である。中国共産党の指導に対する期待度は、「ある」「非常にある」は回答者のわずか一七％、「あまりない」「ない」が七二％であった。国家に対する期待は、「ある」「非常にある」が六八％、「あまりない」「ない」が一八％であった。二〇〇八年六月、『中国青年報』社会調査センターと題名調査網が共同で行ったオンライン調査には八一三九人が参加したが、その結果は、官僚は「刻苦奮闘、勤勉儉約」の精神を堅持すべきであるとする者が八一・五％、

「庶民の暮らしを心にかけて、民意に耳を傾け、庶民の苦しみを知る」べきが三九・〇%、「官僚は責任感を持ち、問題が起こった時に逃げたり、ごまかしたりしない」が三四・八%、五三・五%が「今の官僚組織は形式主義が横行し、お上意識が強い」、五三・二%が「社会に権力を利用して私欲を図る汚職腐敗現象がある」と考えている。

中国の民主化問題は、一九七八年まではタブーであったが、一九七八年以降も敏感な話題であり、大衆運動が起こるたびに常に最も人々を惹きつけるスローガンであった。中国の開放度の高まりにつれて、政治体制改革の将来の方向として、民主化はすでに官民双方の高い支持を得ているが、民主化とは何ぞや、いかにして実現するかという点では官民の見解は異なる。民間では大部分が民主化の現状に不満を表している。一九八八年春、学術界で広く流布した、米中ソ三国の指導者が一緒に天帝に拝謁して自国の民主化がいつ実現するか訊ねるといふ順口溜には、民主化の進展の遅さに対するインテリ層の不満と迅速な改革への願望が表れている。

本質について言えば、順口溜はある時期の中国知識層の政治、社会、文化についての観念を反映したものである。「毛沢東は人民を起ち上がらせ、鄧小平は人民を富ませ、江沢民は人民を宙ぶらりにした」（毛沢東讓中国人民站起来、鄧小平讓中国人民富起来、江沢民讓中国人民吊起

来）、「毛主席は太陽のよう、どこもかしこも等しく照らす。鄧小平は月のよう、満ち欠けあって不平等。江沢民は星のよう、光が届くかどうか分からない」。これらの順口溜は、毛沢東時代の絶対的な貧困の下での「平等社会」への懐旧の中に、経済発展と制度改革の立ち後れがもたらした社会格差の拡大という当今の傾向への不満を内包し、さらには現在のインテリ層に見られる「新左派」を代表とする政治保守主義の影響も感じられる。

順口溜は、現代中国社会の実態を再認識させてくれる鏡である。それは簡潔でユーモアに富んだ表現と、口ずさみ易い調子で、大衆にとつて切実な政策や行政、民生の状況を反映し、会心の笑いと共に共感を呼び起こす。「党の政策はお月さま、満ちたり欠けたり定めなし」。官僚の腐敗を直裁に指弾する順口溜はもっと多い。「杯拏げれば政策ゆるみ、杯干せば、よし、わかつた」などなど。毛沢東の詩「七律・長征」をもじった次の一句も興味深い。「宴会は遠征の難きを恐れず、万水千山ただこともなし。五糧・茅台酒（いづれも名酒の名）は細き浪を騰らせ、スッポンに蟹に魚団子。三步四歩で心も温まり、麻雀卓囲んで五更寒し。さらに喜ぶ美人の雪の肌、三陪（ホステスが客にはべつて、ダンスと酒の相手をする）こと」過ぎたる後、盡く顔をほころばす」（喝酒不怕遠征難、万水千山只等閑。五糧茅台騰細浪、烏龜螃蟹煮魚丸。三步四歩心口暖、麻將桌

前五更寒。更喜小姐白如雪、三陪过后尽开颜」。商品経済の急速な発展過程にあつて、いかに黨員および幹部への信頼を打ち立てるかは非常に重要である。権威は公正と清廉から生まれ、風紀は上から下に範を垂れるべきものである。順口溜に言う。「村は隣村を見習い、家は隣家を見習い、大衆は黨員を見習い、黨員は幹部を見習う」。

また、一部には指導者を個人攻撃する類のものもある。

これらには伝統的な農民反乱や起義における暴力性を帯びた群集心理に通じるものがあり、現代的な民主概念とは言い難い。筆者の耳に入った中で攻撃や非難が最も集中していたのは元國務院総理事李鵬であり（国家機密に関するもの、長江の決壊を塞いだ話など）、その次は前総書記江沢民であった（三國志の「三英雄呂布（三英雄が呂布と戦う）」のバロデイ、元アメリカ大統領ブッシュとのホットラインに関するものなど）。これには当然一九八九年の六四運動（第二次天安門事件）が大いに関係しているだろう。

これと関連するのが、一部の順口溜に見られる地方蔑視の傾向である。それらの多くは河南人を蔑視したもので、現代化の進展の中で相対的に立ち遅れた地域がその地域の偽造製品や治安の悪さ、教育水準の低さ、市場ルールの無視から生み出した否定的イメージを反映したものである。それはまた、東部の都市と中西部との経済格差の拡大を背

景に、一部の都市住民の間にある経済構造の転換、企業改革、出稼ぎ農民ラッシュがもたらした就業の困難、人口過密、社会資源の不足、犯罪率の増加などの問題に対して、八つ当たりしたい心理状況、さらには成金的な傲慢さや気位の表れでもある。

この数年、温家宝総理に関するものが増えてきているが、肯定的に評価するものが多く、温氏の親民イメージを周恩来に比するものまであるのは興味深い。中国民衆には人徳で人物を評価する伝統があり、特に親民・愛民イメージの政治家を好む。二〇〇二年後半に胡锦涛・温家宝体制が成立して間もない翌年春にはSARS問題が発生、また以後の度重なる炭坑事故にも、温家宝は現場に身を投じて慰問した。二〇〇八年五月の四川地震では政府は強力な救援措置を採り、温氏自ら被災地に入って救援活動を指揮し、慰問した。これらの行為はテレビ中継を通してクローズアップされ、政治腐敗やインフレ圧力に晒される中国で、人々は心の奥底にある「清官」（清廉な官僚）願望を呼び覚まされ、新たな心の拠り所を見出したかにみえる。あるネット投稿者は、社会の基層に歩み入って実情に触れようとする温氏の政治姿勢や日頃の質素な暮らしぶりに関する順口溜を紹介して、こう感嘆している。「巷の声」に国家の隆盛と民族の復興の息吹を感じる。こういった「巷の声」は「公の宣伝」を顔色なからしめるものだ³³。これ

は近年の順口溜においては珍しい、政治家に関する肯定的伝説である。

中国史上、順口溜の流布が増えるのは、往々にして社会危機が高まり、民心が揺らぐ時期である。これは民衆の社会的期待と当局の発展戦略とのずれが大きく、民衆が日々実感している政治腐敗や生活苦や社会問題が、当局が描いてみせる「海晏く河清し」といった天下泰平の錦絵から遠くかけ離れていることを示している。大衆の情緒は必ずしも正確とは言えず、デマの再生産となっていることも少なくなく、社会に対する見方も一面的な面がある。しかし、民間の叫び声は社会政策や管理体制、言論機構に存在する重大な問題を単刀直入に指摘しており、決して根も葉もないことではなく、なおざりにはできないものである。もし経済の発展や社会の公正性などの問題について実効ある改善がなされず、民衆の叫びを無視し続けるなら、二〇〇八年七月に貴州瓮安、雲南孟連などで相次いで起こった大規模な民衆の抗議や暴動はいつでも起こりうる。これは非常に憂慮すべきことである。

むすびに

永い間、中国史の視野は官による史書編纂の伝統の影響を受けており、「皇帝の言行録」的性格を特徴とし、国家

の盛衰を内容としている点で、基本的に帝王史であった。このような上から歴史を俯瞰する視点は、中国政治社会の重要な特徴を捉え、歴史の大まかな方向性を反映しているが、一方で歴史を創造している民衆を排除していて、社会の変遷や民衆の心理、政治と社会変化の関係などを真に見極めることを困難にしている。二〇世紀以降、大衆文化の勃興や草の根の民主主義を背景とした社会史が盛んになったが、伝統的史観は依然として強い生命力を持つっており、民衆は依然として歴史の主体と見なされてはいない。二〇世紀半ばから「新しい歴史学」が次第に国際的な歴史学の主流になると、下から歴史を考察する視点によって、歴史学者たちはより広い視野から伝統的歴史学の「盲点」に注目するようになった。民衆の生活と経済政策や政治発展との関係、あるいは国家と社会の関係の議論の中に、偏りを是正し、「全体史」をなんとか再現しようとする歴史家の努力を見ることができると、順口溜と現代中国社会の変化との関係を考察することは、こうした歴史観の転換後の一つの試みといえることができる。

順口溜は、真偽のほどが不確かな情報の行間から現代中国社会を客観的に理解することを可能にしてくれる貴重な視点であり、その価値は言うまでもない。官製資料は全体的な社会発展の状態を反映するが、技術的政治的原因から事件経過や社会矛盾が故意に伏せられることもあり、その

資料が必ずしも真実であるとは限らない。社会生活、特に民衆心理の具体的状態などに至っては何をか言わんやである。順口溜はそこにこれ以上ない民間テクストを提供する。そこには余計な粉飾も配慮もない。情緒的な表現は明らかに欠陥であるが、その真実性は疑いの余地がない。双方を突き合わせてみて初めて中国社会と大衆の政治文化心理の実情が分かるのである。

心理学的に分析すると、順口溜の広範な流布は、大衆の社会に対する基本的な感じ方を体現しており、具体的事実が正確であるかどうかは誰も真面目に追及しない。重要なのは、集団のさまざまな感情と認識を織り交ぜた論議が、ある社会現象に対する世論を次第に形成していくことである。大衆の期待と恐れを満足させ、ある種の予感に合致する時、それは大きな快感をもたらすのである。さらに、順口溜の流布は集団的アイデンティティの形成をも意味している。事実自体は時にはさほど重要ではなく、順口溜の流布に参与することによって、集団行動に参与したことになるのである。流布の過程では、みな何がしかの味付けをし、ディテールを修正し、仮説を加えていく。順口溜の流布過程は、社会学で言うところの「匿名心理」の過程でもある。「ある人が言うには」の前置きで罪悪感を免れ、長い間抑えてきた感情衝動を心置きなく表現できる。このため、言論規制が厳しい地域であればあるほど、順口

溜の流布が盛んとなる。遊び心も順口溜流布者の心理の一つである。それが真実であると信じているとは限らなくても、笑いを取ったり、注目を集めたりできれば、大きな満足感を味わえるのである。明らかに、順口溜の流布過程では誰もが創作者である。このゲームに加わらないとか、調子を合わせないとすれば、集団から爪弾きにされるか、自ら孤立を選ぶことになる。

メディア学や社会学の角度から見れば、順口溜の発生や流布形式、機能、価値などの面から切り込んで、政治小話の現代中国の社会生活における作用や地位を考察することは非常に価値のある課題である。順口溜発生の背景とそのメカニズムは非常に複雑で、流布手段や経路は一定ではなく、内容となるとさらに千変万化の様相を呈する。しかし、ひとつ明らかにするのは、順口溜は政治体制および官僚に対する監視が欠如していることの重大問題を屈折的に反映しているということである。順口溜は社会の問題と矛盾、各階層間の利害の主張を反映している。またジョークやセックス、祝祭日の挨拶といった内容は、中国が次第に政治と距離を置く世俗化の時代に入ったことの現れである。順口溜の内容の多元化は、中国社会の経済発展、教育水準の向上、社会構造の再編、各階層の利害のバランス追求の表れである。順口溜の流布が紙媒体によらないことは、技術的特徴であるとともに、体制側の世論コントロールに対

するやむを得ざる表現でもある。一方、当局の順口溜の流布に対する寛容さは、現代中国における思想統制のますますの開放の結果と見ることもできるし、また当局が意図的に社会の「調節弁」としての機能を期待しているとも取れる。

民意が社会生活の動向を代表できるかどうかについては、西洋ではプラトン、ヘーゲルに代表される「懷疑—否定学派」がある。彼らは社会運営に関わる政策決定や管理システムは複雑で、狭い視野と経験しか持たない大衆には、政治が機能する全過程を真に理解することは不可能だとする。一方、ルソーらは、民意こそ政府の存立基盤であり、形式上の憲法に先行する「真の憲法」であり、政治方針を決定する際の決定的要素であり、民意の支持を欠いては、いかなる社会管理も社会操作も何の価値もないものだとする。客観的に見れば、両者の観点は共に道理がある。しかし、現代世界の民主政治の運営プロセスにおいて、特に現代的メディアが可能にした瞬時の送受信、グローバルな広がりという技術面の影響によって、民意は政治運営において絶対的な影響力を持つに至っている。現代中国の順口溜は果たして真の民意をどれほど反映しているのか。大衆の政治や社会の認識にどれだけ影響を与えているのか。政治的権威に対するガス抜き効果は如何ほどなのか。これらの問題を真剣に考察する必要がある。なぜなら、ことは

現代中国社会の行く末をいかに客観的かつ正確に捉えるかという重大な問題に関わってくるからである。

注

- 〈1〉 農林統計協会、二〇〇一年、一三九—一四〇頁。
- 〈2〉 董叢林「晚清社会伝聞的宏観態勢観照」『史学月刊』二〇〇七年第九期。
- 〈3〉 韓芳「五十年代的理想」『今晚報』二〇〇八年八月一日。
- 〈4〉 天鷹「一九五八年中国民歌運動」上海文芸出版社、一九五九年、二—一二頁。
- 〈5〉 「民調顯示近九成公衆肯定信訪問責制」『中国青年報』二〇〇八年八月四日。
- 〈6〉 同右。
- 〈7〉 喻国明「解構民意——一個輿論学者的実証研究」華夏出版社、二〇〇一年、二九五頁。
- 〈8〉 白鋼・張琢・加々美光行「中国民主化のプロセス」『中国21』Vol. 8、二〇〇〇年五月、一二—二四頁。
- 〈9〉 一七〇九名の回答者中、人民代表大会は機能しているという回答が一五・三九%、ある程度機能しているは四五・五二%、機能していないが二二・五九%であった（一九八七年）。閔琦「中国の政治文化——なぜ民主主義が育たないのか」田畑書店、一九九一年、一〇六頁。

〈10〉 一七二三名の回答者中、政府に親しみを感じる人は五・三二％で、感じないが四八・六九％であった（一九八七年）。関、前掲書、一一二頁。

〈11〉 一七〇五名の回答者中、叛乱行為は正当であると考え人はわずか一四・三二％で、叛乱に反対は八五・六九％であった（一九八七年）。関、前掲書、五四頁。

〈12〉 小島朋之『中国の政治社会——富強大国への模索』芦書房、二〇〇〇年一月、四八六頁。

〈13〉 一三六九名の回答者中、中国発展を妨げている最大の問題は「政治制度」だと考える人は七二・二五％の高さに達し、同意しないはずか二七・七五％であった（一九八七年）。関、前掲書、一一三頁。

〈14〉 加々美光行「二十年の政治体制改革とは何だったのか」『中国21』Vol.5、一九九九年三月、二七—三二頁。

〈15〉 一四二三名の回答者中、政府の行政効率に不満を感じる人は六五・八八％で、満足な人は二一・二二％であった。一四一八名の回答者中、行政幹部の風紀に満足している人は二八・四四％、不満な人は六九・八四％であった。「行政幹部の多くが人民の公僕たり得ている」と考える人は五九・四三％、同意しない人は四〇・五八％であった（一九八七年）。関、前掲書、一一四—一一七頁。

〈16〉 一三三七名の回答者中、政治改革は必要不可欠と考える人は六六・七四％、同意しない人はわずか一八・六九％であった（一九八七年）。関、前掲書、一二五頁。

〈17〉 孔繁森（一九四四—一九九四）、山東省聊城人。元中

国共産党聊城地区委員会宣伝部副部長。一九七九—一九八二年にかけて、チベット支援に参加し、チベット自治区崗巴県で県委員会副書記を務める。一九八八年、孔は聊城行政公署副署長であったが、再びチベットに赴き、ラサ副市長に着任する。一九九二年二月、より条件の厳しい阿里地区の地区委員会書記の任に着くが、一九九四年一月二十九日、新疆塔城に辺境貿易の視察に向かう途中、交通事故に遭い、殉職した。

〈18〉 王宝森（一九三六—一九九五）、中国共産党北京市委員会常務委員、副市长、規律委員会書記。陳希同事件の共犯で、罪を畏れて自殺した。主な罪は、公金二五万余人民元・二万米ドルの横領、公金一億余人民元・二五〇〇余万米ドルを弟や愛人、その他の関係者の営利活動のために融通し、一三〇〇万米ドル余りの損失を出した。モラルを失い、腐敗しきっていた。

〈19〉 マイク・タイソン (Mike Tyson, 1966)、アメリカオハイオ州出身。世界的に有名なボクサー。元WBC重量級チャンピオン、元WBA重量級、IBF重量級チャンピオン。

〈20〉 和坤（一七五〇—一七九九）、清満州正紅旗人。生員出身。乾隆帝の治世に戸部、吏部尚書、軍機大臣、文華殿大学士を歴任。実務能力に秀で、乾隆帝の意を迎えるのに長け、汚職が習性化していた。一七九九年、嘉慶帝は和坤に二十の大罪を挙げ、死罪に処した。没収財産は莫大で、当時「和坤失脚で、嘉慶が太る」と言われた。

〈21〉 高学歴層の回答者中、自身が合理的な収入と生活水準を得ていると思う人は二七・一七%で、思わない人は七一・八三%の高さに達した。知識層が高い政治的地位を得ていると思う人は三〇・五〇%、思わない人は六九・五〇%の高さに達した。中国に思想の自由があると思う人は三一・四五%で、思わない人は六八・五五%に達した。政治運営に参加する機会と条件があると思う人は三〇・九四%で、思わない人は六九・〇六%の高さに達した（一九八七年）。

関、前掲書、一二二頁。

〈22〉 「濫発黄色短信可能受法律制裁」『新京報』二〇〇六年八月二日。

〈23〉 http://www.mit.gov.cn/art/2008/05/24/art_5137_47515.html

〈24〉 「今天、中国市民想些甚麼？」北京零点調査公司編『零点調査』大衆文芸出版社、一九九八年、一一二頁。

〈25〉 「腐敗、千夫所指」前掲『零点調査』一五頁。

〈26〉 張立昌（一九三九―二〇〇八）、一九九七―二〇〇七年にかけて中国共産党天津市党委員会書記を務め、二〇〇三年中国共産党中央政治局委員に当選した。

〈27〉 天津の名物菓子。いろいろな味つけをした落花生のヌナック。

〈28〉 天津の名物菓子。いろいろな味つけをしたそら豆のヌナック。

〈29〉 市党委員会書記張立昌が外部に天津の経済発展について虚偽の報告をしたことを天津市民が風刺して、有名なス

ナックと並べて皮肉ったもの。

〈30〉 羅水「喬石責江凌駕総書記」『争鳴』二〇〇三年第一期。

〈31〉 童斌・汪亮亮「民調探究怎麼樣的官員堪稱人民公僕」『中国青年報』二〇〇八年六月九日。

〈32〉 回答者中、民主化の前途に楽観的な人は三二・四四%、あまり楽観的でない人は四六・一五%、悲観的な人は三・四七%であった。関、前掲書、一四二頁。

〈33〉 <http://www.wenxuecity.com/BBSView.php?subID.11000>
五年一月一四日

※本文中の「」は訳者が補ったものである。